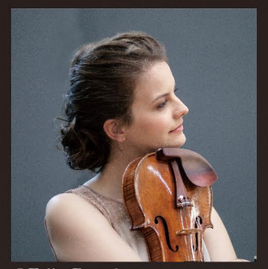
出演者プロフィール

VERONIKA EBERLE （ヴェロニカ・エーベルレ） Violin


©Felix Broede

ドイツ南部のドナウヴェルトに生まれ、6歳からヴァイオリンを始める。4年後にミュンヘンのリヒャルト・シュトラウス音楽院にてオルガ・ヴォイトヴァの下で学び、1年間、クリストフ・ポッペンからプライベートレッスンを受けた後、2001年から2012年までミュンヘン音楽大学にてアナ・チュマチェンコに学んだ。17歳の時、サイモン・ラトル指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団とベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲で共演し、世界の注目を集めた。

これまでに、ロンドン交響楽団、ロイヤル・コンセルトヘボウ管弦楽団、チューリッヒ・トーンハレ管弦楽団、フィラデルフィア管弦楽団、ロサンジェルス・フィルハーモニック、NHK交響楽団などのオーケストラと共演している。指揮者では、サイモン・ラトル、ベルナルト・ハイティンク、ダニエル・ハーディング、クリスティアン・ティーレマン、ヤニック・ネゼ＝セガン、ケント・ナガノ、パーヴォ・ヤルヴィ、アラン・ギルバート、ロジャー・ノリントンなどと共演を重ねている。

2003年、マインツ（ドイツ）のイフラ・ニーマン国際コンクール優勝。2011年から2013年には英国BBC Radio3のニュージェネレーション・アーティストにも選ばれた。

使用楽器は日本音楽財団から貸与されたストラディヴァリウス1700年製ヴァイオリン「ドラゴネッティ」。

Stradivarius 1700 Violin “Dragonetti”
ストラディヴァリウス1700年製ヴァイオリン「ドラゴネッティ」

このヴァイオリンはネックの部分までも製作当時のものが使用されているとても貴重な楽器である。イタリアの著名なコントラバス奏者ドメニコ・ドラゴネッティ（1763～1846）によって大切に所有されていたことから現在この名前で呼ばれている。日本音楽財団の購入直前には、世界的ヴァイオリン奏者、フランク・ペーター・ツィンマーマン（1965～）によって演奏されていた。

山田 武彦 （やまだ たけひこ） Piano

東京藝術大学作曲科卒業、同大学院作曲専攻修了。1993年フランス政府給費留学生としてパリ国立高等音楽院ピアノ伴奏科に入学、同クラスの７種類の卒業公開試験を、審査員の満場一致により首席で一等賞（プルミエ・プリ）を得て卒業。フランスの演奏団体である2e2m、L'itineraire、Triton2等でソリストとして演奏し、現代音楽の紹介を務める。またフランス北部のランス市において大戦後50周年記念式典のために、ヘブライ語による委嘱作品を発表。帰国後はピアニストとして数多くの演奏者と共演、的確でおおらかなアンサンブル、色彩豊かな音色などが好評を博し、コンサート、録音、放送等の際のソリストのパートナーとして厚い信頼を得る。

近年は「クラシックカフェ」マスター役、「イマジン七夕コンサート」「山田武彦と東京室内歌劇場」“浅草オペラ”ロングラン公演の音楽監督を担当するなど、ユニークなコンサートの企画にも参加している。これまで洗足学園音楽大学に於いて作曲及びピアノコース統括責任者を歴任。現在同大学教授、東京藝術大学招聘教授。全日本ピアノ指導者協会正会員、日本ソルフェージュ研究協議会理事、日本ピアノ教育連盟会員。

本公演は 日本音楽財団 NIPPON MUSIC FOUNDATION と 公益財団法人 千葉県文化振興財団 の連携協定により開催しております。

千葉県の音楽文化の振興と普及を目指し、世界の文化遺産とも言われる弦楽器・ストラディヴァリウスを貸与された次世代の若手演奏家を起用して、千葉県東部地域や南部地域で世界最高峰の音色に触れるコンサートを開催します。

日本音楽財団協定プログラム・千葉県誕生150周年記念

ヴェロニカ・エーベルレ ヴァイオリンリサイタル

VERONIKA EBERLE Violin Recital

南総公演
令和5年9月11日（月）
14:00開演
千葉県南総文化ホール 大ホール

東総公演
令和5年9月12日（火）
14:00開演
千葉県東総文化会館 大ホール

主催：日本音楽財団 NIPPON MUSIC FOUNDATION　公益財団法人 千葉県文化振興財団　助成：Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION　文化庁 文化庁文化芸術振興費補助金 劇場・音楽堂等活性化・ネットワーク強化事業（地域の中核劇場・音楽堂等活性化） 独立行政法人日本芸術文化振興会

後援：千葉県 【南総公演】館山市、木更津市、勝浦市、鴨川市、君津市、富津市、 袖ケ浦市、南房総市、鋸南町各教育委員会
【東総公演】銚子市、東金市、旭市、匝瑳市、香取市、山武市、多古町、東庄町、横芝光町各教育委員会

CHIBA 150th 千葉県PRマスコットキャラクター チーバくん

プログラム
Program

クララ・シューマン
ヴァイオリンとピアノのための3つのロマンス 作品22
第1曲:アンダンテ・モルト　第2曲:アレグレット　第3曲:情熱的に速く

ベラ・バルトーク
ラプソディ第1番
第1部:モデラート　第2部:アレグレット・モデラート

- 休憩 -

井上武士(山田武彦 編)
海

ピョートル・チャイコフスキー
なつかしい土地の思い出 作品42
第1曲:瞑想曲　第2曲:スケルツォ　第3曲:メロディ

曲目解説
Program note

◆ クララ・シューマン:ヴァイオリンとピアノのための3つのロマンス 作品22

クララ・シューマン(1819〜1896)は、19世紀で最も有名な女性ピアニストであり、作曲家、教育者としても非凡な才能を示した。また、ロベルト(1810〜1856)の妻として夫を支え、8人の子ども育てたことでも知られる。

1853年5月、のちに19世紀後半を代表するヴァイオリニストとして名を成す、ヨーゼフ・ヨアヒム(1831〜1907)が、ライン音楽祭に出演するためにシューマン夫妻の住むデュッセルドルフにやってきた。年末にデュッセルドルフ市の音楽監督を退任したロベルトは、若いヴァイオリニストの輝く才能に惹かれた。夫妻と交流を深めていき、ロベルトもクララもヨアヒムのために作品を書いた。クララの「ヴァイオリンとピアノのための3つのロマンス」は、彼の音楽性を生かしたのびのびと歌い上げるヴァイオリンとそれに寄り添うピアノによる3つの小品から構成される。

第1曲(アンダンテ・モルト、変ニ長調、3/8拍子)密やかに始まり、豊かな流れのなかで2つの楽器は美しく掛け合う。ダイナミックな広がりをみせ、静かに結ばれる。

第2曲(アレグレット、優しさをもって、ト短調、2/4拍子)不安げな表情のヴァイオリンをピアノが支える。ロベルトを思わせるファンタジックな世界は、中間部で長調に転じて明るく視界が開ける。再び主部が戻り、最後はト長調の主和音で軽やかに結ぶ。

第3曲(情熱的に速く、変ロ長調、3/4拍子)波打つピアノの伴奏にのせてヴァイオリンが息の長い旋律をドラマティックに歌い上げる。中間部(ト長調)はヴァイオリンとピアノが親密な対話を繰り広げる。

◆ ベラ・バルトーク:ラプソディ 第1番

20世紀ハンガリーを代表する作曲家ベラ・バルトーク(1881〜1945)は、若き日にはコダーイとともにハンガリーやルーマニアなどさまざまな地域の民謡の収集や研究を行い、やがてその成果をもとに、民謡に基づいた独自の創作を展開していった。

ヴァイオリンとピアノのための「ラプソディ第1番」は、1928年に作曲され、同郷の名ヴァイオリニスト、ヨーゼフ・シゲティ(1892〜1973)に献呈された。もとになった素材について詳しい記載はないが、ルーマニアやハンガリーの農民の歌をよりどころとしている。全体は、2部分から構成され、前半と後半を緩急(ラッシュとフリッシュ)で対比させるのは、ハンガリーの民俗舞踊の一種であるヴェルブンコシュに由来すると言われる。

第1部(モデラート、4/8拍子)は、ピアノの反復される和音にのって、ヴァイオリンが付点のリズムが特徴的な力強い主題を奏する。中間部は静かに、憂いを帯びた旋律が示される。第2部(アレグレット・モデラート、4/4拍子)は、ヴァイオリンとピアノの軽やかな掛け合いから始まり、テンポは次第に速くなり、ヴァイオリンの華やかな技巧が次々と披露される。

◆ 井上武士(山田武彦 編):海

井上武士(1894〜1974)は、群馬県出身の日本の作曲家。東京音楽学校(現在の東京藝術大学)で学び、東京音楽大学教授を務めた。唱歌や童謡、また日本全国の学校の校歌を数多く手がけ、なかでも唱歌では、「チューリップ」や「海」がよく知られている。

1941年に発表された「海」は、林柳波の歌詞につけられた大らかな音楽で、誰もが知っている日本の原風景を歌った曲である。今回は、作曲家でもあるピアノの山田武彦による編曲版で演奏される。歌のパートを受け持つエーベルレの艶やかな音色によって、聴き手の心になかに海の情景が広がるだろう。

◆ ピョートル・チャイコフスキー:なつかしい土地の思い出 作品42

まばゆい光を放つ、ヴァイオリン協奏曲ニ長調が有名なピョートル・チャイコフスキー(1840〜1893)だが、意外なことにヴァイオリンのための作品は多くない。協奏曲は1曲だけ、それ以外は小品で、それらは、人生最大の危機とされる結婚騒動(1877)をはさむ数年に集中している。

不幸な結婚から逃れるためにモスクワを離れたチャイコフスキーは、スイスの保養地クララランやイタリアの青い空の下で過ごすなかで精神の安定を取り戻し、1878年には交響曲第4番、歌劇『エフゲニー・オネーギン』、ヴァイオリン協奏曲と、次々と傑作を世に送り出していく。ヴァイオリンとピアノのための「なつかしい土地の思い出」も、同年5月に完成させた。全体は、3つの小品から構成され、第1曲「瞑想曲」はもともとヴァイオリン協奏曲の緩徐楽章として構想されたものの、協奏曲で用いるには短かったため、独立した小品として完成させ、その後に「スケルツォ」と「メロディ」を続けた。

第1曲「瞑想曲」(アンダンテ・モルト・カンタービレ、ニ短調、3/4拍子)落ち着いたピアノに導かれ、ヴァイオリンが哀愁を帯びた主題をたっぷりと歌う。新しい楽想や転調を経て主題は繰り返され、最後は高音を美しく響かせる。

第2曲「スケルツォ」(プレスト・ジョコーソ、ハ短調、6/8拍子)躍動感のある主部は、イタリア・ナポリの舞曲タランテラを思わせ、中間部(変イ長調)は、和やかな旋律が表情豊かに歌われる。

第3曲「メロディ」(モデラート・コン・モート、変ホ長調、3/4拍子)ヴァイオリンが奏でる甘美な旋律は、幸福感に満ちている。

曲目解説:柴辻 純子